

『ノルウェイの森』上・下巻

講談社文庫
著者：村上春樹
価格：上・下各514円

さて、散々迷った挙げ句いわゆる古典ではなく本書を取りあげることにしたのだが、読み返してみても新たに気づいた点があった。今年、『1084』が話題になっているが、『ノルウェイの森』の方がリズム感のある瑞々しい文体で書かれていて、村上春樹の才能が惜しみなく注ぎ込まれている。切ない恋愛物語でありながら彼独特の文体が存分なく味わえる美しい作品である(ただし、性愛描写が苦手な人はパスした方がいいでしょう)。そして、この物語には学生生活を送る上でのある種のバイブルの役割が隠されていると思う。それは決して効率よく単位や資格などを取り、希望の就職を滞りなく果たすためのものではないし、多くのガールフレンドを作るという意味でもない。ここに託されたメッセージは、挫折や他者との葛藤を抱えながら人間的に成熟していくことの大切さである。もともと、この本を最初に読んだとき学生だった私はこのような説教臭い読み方はせず、ただただ文章の美しさと物語の迫力に圧倒されていた。



「僕は三十七歳で、そのときボーイング747のシートに座っていた。その巨大な飛行機はぶ厚い雨雲をくぐり抜けて降下し、ハンブルク空港に着陸しようとしているところだった」。こんな書き出しで始まる村上春樹の代表作は、1969年から70年にかけての大学生生活を17年後に回想するシーンで始まっている。この本が出版された1987年当時、私は大学5年生だった。われわれの間では、この本を読んだらガールフレンドにプレゼントするという奇妙な風習が流行っていた。小説の時代設定には、まだ学生運動の雰囲気が残っている。私が学生だった1980年代中頃もそれは残っていて、学生自治会が「学費値上げ反対闘争」なるものを主導し1月くらいから後期の授業や試験がストライキでなくなったりした。喜んだのも束の間、即座に大学当局は全科目レポート提出という反撃に打って出て、その冬われわれは瞬間にして天国から地獄を味わうことになったのだった。

学生スタッフ ヨラム 3



後期の授業もはじまり、再び時間に追われる毎日です。楽しみかたが盛りだくさんの秋だというのに、気づけば季節はみるみる深まっています。時が操れたら…:と思い、今回は、時を止めて「ころろ再生」してくれる聖地、秋の吉野山を紹介します。

残り少ない夏休みを利用して、友達と吉野山に行ってきました。はじめは、列車に乗ってのんびり、と思ったのですがシルバークエストと重なったこともあり、高速道路のETC搭載車1,000円!の誘惑に負けての日帰りツアーとなりました。岡山から奈良までの高速料金が1,000円なのかと思ったのですが…大きな勘違いでした。山陽道と中国道、おまけに阪神高速や阪奈道まで個別料金。通常よりは割引になっていたのですが、お財布にはやさしくなかったのですが。

もう一つの理由は、平成16年に金峯山寺を含む吉野・大峯が、「紀伊山地の霊場と参詣道」としてユネスコの世界遺産、それも日本ではじめての「文化景観」に登録されたことです。世界遺産ともなれば一生に一度は是非、足を運びたいもの。本来なら桜満開の吉野山を一目見たいところですが、これからの季節に欠かせないのが秋の紅葉。しかも、ライトアップも期間中実施されるそうです(11月14日(土)~29日(日)17時30分~21時まで)。きっと、いつもの慌ただしい時間との闘いから解放されることでしょう。

今回の吉野訪問は、引越した友人に会うためです。彼は、家業のしいたけ園を継ぐために移住したのですが、前職はプロのカメラマンで、女優の松坂慶子さんを撮影したキャリアの持ち主。当時は、なぜ転職を思い切れたのか?と疑問だったのですが、自分も吉野山に触れ、心が癒されることで、はじめて理解できました。吉野山には疲れた心を癒す神秘的な再生能力があるようです。



吉野は古代より神が宿る聖地とみなされてきました。7世紀後半に役行者が修験道場として開いたのが金峯山寺のはじまりです。それゆえに、金峯山寺は修験道の聖地となっています。修験道は自然に学ぶ宗教であり、金峯山寺は、人が自然と共生していく大切さを未来に伝える活動を行っています。地球の環境問題が深く問いただされている現在、私は、吉野山を歩きながら、大自然を敬う心を忘れてはいけなと思います。

(学生スタッフ・木山英俊)

より良い広報誌を作成するために、みなさまからのご意見・ご要望をお待ちしております。取り上げてほしい話題、質問したいことなど、何でも結構ですので、右記連絡先までお寄せください。

岡山大学広報誌

第52号
2009.10



発行/岡山大学総務・企画部総務課

〒700-8530 岡山市北区津島中1-1-1
TEL. (086) 251-7292 FAX. (086) 251-7294
E-mail. www-adm@adm.okayama-u.ac.jp

<http://www.okayama-u.ac.jp>



創立60周年
2009